

不登校生徒への対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、①小学校時から登校習慣や学習習慣が身に付いていない、②他者の目線に過敏で集団活動になじめない、といった原因を抱え、通常登校できない状況が続いている。また、保護者への支援も必要であり、ケースワーカーやＳＳＷの訪問支援を受けている。

具体的な取組

○修学支援委員会<週 1 回>

管理職・不登校加配教員・教育相談コーディネーター・学年主任・生活指導主任・生活指導員・ＳＣ・ＳＳＷで構成し、当該生徒の状況を密に報告・確認している。

また、必要に応じて、ケース会議を開催し、緊急性のある案件にもすぐに対応できるようにしている。

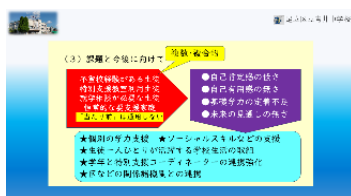
○外部関係機関との連携 <適宜>

当該生徒の状況に応じて、積極的に関係機関との連携を図っている。

- ・ 小学校(兄弟姉妹関係)
- ・ こども支援センター(ＳＣ他)
- ・ 児童相談所／福祉事務所
- ・ 無料学習塾
- ・ 私立フリースクール など

○区内研修における実践報告

区内教育相談コーディネーター研修において、本校の取組と実践内容を紹介発表している。



○登校サポーターの活用

週 2 日午前。登校支援教室に常駐。利用生徒に合わせたプログラムを実施。

個々の生徒に合わせて、教室に入る前の心の準備や、教室復帰を目指した登校や自習のサポートをしている。



成果

現在の長期欠席生徒数は 16 人であるが、いずれも家庭連絡だけでなく、修学支援委員会での情報共有や外部関係機関との連携を密にしている。結果、別室登校や教室復帰に向けて、個々の生徒に応じた対応に努め、家庭とのつながりを保ち続けている。

課題

個々の生徒の自己肯定感・自己有用感の向上に向けた方策について検討し、未来のビジョンがもてるようにする。

不登校加配教員配置校の組織的な取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生であり、入学当初から環境の変化に対応できず、担任が別室で対応をしていた。本校では不登校にならないための魅力ある学校づくりと並行して、今年度から別室支援員（登校サポーター）を配置して、教室に入りづらい生徒も学校での居場所を守り、学習の支援も行っている。本人の登校頻度に波はあるが、学校に居場所ができたため、担任とも定期的に会うことができ、関係構築にもつながっている。

具体的な取組

○別室支援①

当該生徒は、別室支援の開始により、担任だけでなく、別室支援員との関わりを希望するようになり、登校できるようになった。

○別室支援②

学習意欲はあるが教室に入りづらい当該生徒は別室支援員との関わりで、自身のペースで学習を進めている。また、利用者同士のコミュニケーションを図れるようにして社交性を育てている。



○特別支援委員会で生徒の情報共有

週 1 回、管理職、教員、SC、SSW が参加し、休みがちな生徒や不登校生徒の情報共有を行っている。生徒の支援方法を委員会参加者で意見を出し合い、個に応じた対応ができるように努めた。

○生徒会を中心としたプロジェクト

生徒会と加配教員を中心として生徒たちが「なりたい自分」、「魅力のある学校」は何か考える機会を設けた。

「思いやり」、「責任」、「挑戦」を軸に、様々な課題を学校全体で取り組めるように、生徒中心で下図を作成し、生徒全員が毎日学校に行きたいと思えるような魅力ある学校づくりに取り組んでいる。



成果

加配教員と生徒が中心となって、魅力ある学校づくりに取り組んだことで、生徒の意見が反映されやすくなった。また、別室支援を開始したことで、担任のみの関わりにならず、不登校生徒の居場所が増え、完全不登校の防止につながった。

課題

今後、別室利用生徒が増えた際に、対応するための場所やルールの整備が課題である。

個に応じた対応ができるように、引き続き整備を進める必要がある。

スモールステップによる対人スキルの向上及び居場所づくりについて

不登校生徒の状況

- ・友人関係を構築することが苦手であり、集団の中で生活することに不安感がある。
- ・中学1年の夏休み明けから登校渋りがでてきて、9月下旬から欠席が続いた。
- ・現在、校内別室に週2日、教育相談機関に週2日程度通うことができている。

具体的な取組

○担任・学級との関わりの維持

放課後や授業の空き時間を利用して面談を実施し、関わりの継続に努めた。

また、行事参加に向けて、今後の予定の提示や班編成の工夫を行い、コミュニケーションを図りやすい環境を整えた。

○校内別室の活用

個別による学習支援を実施し、欠席による授業進度の遅れに対してのケアを実施した。支援員との関係は良好で、自分のペースで学習を進めている。



○小集団（部活動）の活動

興味があること（絵画）を通して、友達との共通の話題でコミュニケーションを図るようにし、また当該生徒の居場所となるよう、環境を整備した。

結果として、午後の授業と部活動の時間に登校できる機会が増えた。

○教育相談機関の活用

目指す進路の実現に向けて、相談員との関わりを定期的に続けており、保護者との良好な関係性の維持に向けて助言をもらっている。校内別室、相談機関への定期的な活用で登校の習慣を身に付けることができている。

成果

- ・1年生の行事等への参加はできていたが、2年生になってからは学級の生徒とコミュニケーションがスムーズにとれるようになった。
- ・校内別室、相談機関の併用により、生活（登校）リズムをつくることができた。

課題

多様化する生徒の状況に合わせて支援することが難しいため、人員や教室を十分に確保し、細やかな支援を心がけていく。